12.子ども食堂がつなぐ世代交流：新たな交流拠点の確立へ

植野航史

1.現代社会と子ども食堂

近年、全国的に子ども食堂は急速に増加している。子ども食堂は地域住民や NPO 法人、民間団体などが主体となり、貧困家庭へ無料もしくは安価で食事を提供することを目的として発足されるケースが多く、貧困のみならず孤立や虐待などのネグレクトや不登校などの社会問題がきっかけで発足する子ども食堂も少なくない。しかし、今や子ども食堂も多様化し、活動目的や対象者は各子ども食堂によって様々であり、運営形態も異なっている。地域住民や周辺施設の特徴から開催日や時間、場所を対応させ地域に根付いている。

しかし、子ども食堂の形態が変化しても変わらないものがある。それは世代交流である。同世代や多世代などの世代間交流は多くの子ども食堂で存在している。

現代社会はいわゆるネット社会であり、ネットによってつながり、連絡を取り合う時代となっている。ご近所付き合いや地域行事も過疎化し、人と人とが対面した形での交流の場は減少傾向にある。そんなつながりが希薄する社会において子ども食堂の存在は新たな地域の交流拠点となりつつある。子ども食堂を機に多世代のみならず同世代においても交流を深めているため、子ども食堂が地域や居場所を求める人にとっての交流拠点となりうる可能性は高いと考えられる。今回は、子ども食堂を通じた世代交流に目を向け、現代社会における子ども食堂の在り方を、これまで参加してきた、なかよしごはん、西福寺おかげさま食堂、ほんわか食堂の 3 箇所の子ども食堂ボランティアの参加体験を例に踏まえた上で論じていきたいと思う。

2.なかよしごはんと交流

なかよしごはんは熱田区にある子ども食堂で、毎月 7 日、17 日、27 日の月 3 回の午後 5 時 30 分から 7 時まで開催している。子ども食堂は地下鉄の駅から徒歩 5 分ほどで着くくらい駅近で、周辺には、小学校や保育園などがある。天理教会の広い畳の部屋を会場としており、床一面の畳によって、日本の食卓の和を彷彿させるような空間になっている。駅から近く、交通の便も良いため、電車やバス、徒歩や自転車など様々な交通手段で参加する人がいる。開催時間が夕方から夜にかけてであるため、駅に近いことは参加者にとっても安心できるのではないかと思う。なかよしごはんのスタッフやボランティアの方は主婦や地域の方が多く、主婦の知恵や料理へのこだわりが詰まった食事が提供されている。また地域の郷土料理や寄付でいただいた食材を提示して使うことで、安心感や親しみやすさを食事と共に感じることができる。参加者の多くは、親子や小学生が中心で、親子間での交流や、子ども同士の学校以外の交流の場となっている。また、スタッフと一緒にご飯を食べられることもなかよしごはんの特徴であり、小学生の子達に混ざって食事をとることが出来たり、会話をすることもできたりする。親御さんがスタッフの方にメニューの作り方を聞くことや、料理を持ち帰る場面も多く見られるほど、料理へのこだわりが親御さんもとい参加者にも伝わっている。

参加者の席は、空いている席もしくは、相席のような形で他の参加者と同じ長机で食事を取ってもらっている。料理の提供は、スタッフの方が参加者の席まで運んでいる。片付け終了後は、一つのテーブルを囲んで行う振り返りや連絡会を行い、スタッフの意思疎通を図る

ことができ、スタッフ間の繋がりをより強化することが可能である。

なかよしごはんの特徴から交流について考えていくと、スタッフ間は準備や調理、提供、食事、片付けなど様々な場面で一緒に作業するため、幅広い年齢のスタッフ間で交流をすることができる。実際、参加する度に多くのスタッフさんが気軽に話しかけてくれるため、スタッフにとっても安心できる居場所になっている。スタッフの方々は似たような年齢層の方が多く、同世代交流をすることも可能である。しかし学生スタッフは少なめなため、学生スタッフにとっての同世代交流は少し難しくなっている。参加者間では、一つの空間で何組もの家族や参加者が食事をとるため、わいわいとした食事空間がある。しかし、他の家族の視線やスタッフの目線があるため、走り回る子どもや子どもを怒鳴りつける親も少なく、落ち着いて食事をとっている場面が多い。落ち着いた雰囲気は、スタッフの方々や会場が助長して作られているのではないかと思う。そのため、落ち着いたアットホームな居場所を求めてなかよしごはんに参加する方が多いのではないかと思う。

3.西福寺おかげさま食堂と交流

西福寺おかげさま食堂は昭和区にある子ども食堂で、毎月第 2 金曜日の夕方から開催している子ども食堂である。地下鉄から徒歩 15 分ほどのところにある西福寺というお寺を会場に開催している。お寺の造りを生かした広い空間を食事の場として使用しており、2 箇所の部屋で食事を取ることができる。また大広間では、折り紙やプラネタリウムなど様々なレクリエーションを行っており、食事までの待ち時間や食事後の時間を過ごすことができる。お寺の隣に幼稚園があり、参加者の多くは幼稚園児やその保護者の方が中心である。幼稚園児同士が遊んだり、親御さん同士が世間話や情報交換をしたりする場面も多い。スタッフはお寺の関係者や地域の人の他に学生が多く、主に南山大学の方が中心に活動をしている。そのため学生間での関わりを持つ機会も多く、他大学の人とも知り合うことができる。

西福寺おかげさま食堂は参加者が多いが、ボランティアスタッフも多く、スタッフ内で仕事や役割分担を行い、効率的且つスムーズな運営スタイルが整っている。しかし、南山大学以外の学生ボランティアは継続的や定期的に参加する人は少なく、回によってはスタッフ不足に陥る日もある。席はあらかじめスタッフが参加者の人数を把握した上で割り振り、割り振った席で食事を取ってもらう仕組みをとっている。料理の提供は、スタッフの方が参加者の席に事前に運んでいる。この仕組みによってスムーズな案内や提供が実現し、参加者の多い子ども食堂の運営を効率化している。活動の最後に行うミーティングでは、それぞれの担当や役割ごとにまとまって報告をし合う。そうすることで次回以降に改善したりして、ボランティアスタッフ含め全員でより良いものにしようという心がけを感じることができる。

西福寺おかげさま食堂の特徴をもとに交流について考えていくと、幼稚園児などの子どもたちと学生スタッフはレクリエーションを通して、交流をすることができる。レクリエーションはただ時間を潰すための時間ではないことが参加することでより実感することができる。伝統行事や季節に絡んだイベントを行う回もあり、レクリエーションによって楽しんでいるのは参加者のみならず、スタッフも懐かしさや、季節感を味わうことができる。また、学生スタッフが子どもたちと交流することによって、親御さんは多少安心して、子ども食堂の時間を過ごすことができる。そのため、親御さん同士での会話をする機会も増えるため、ママ友同士の居場所としても存在している。学生スタッフ同士でも交流を深めることが可

能である。定期的に参加することで、学生スタッフの中心である南山大学の方々とも打ち解け、仲良くなることができる。しかし、参加頻度が少ないと学生スタッフの中の輪に馴染めず、居場所を失ってしまう。初めて参加する学生ボランティアにとっては馴染みにくい空気感が存在しているのではないかと感じた。

4.ほんわか食堂と交流

ほんわか食堂は港区にある子ども食堂で、毎月第 3 土曜日のお昼頃に開催している。場所は東築地防災センターや明南病院の講堂と回によって異なるが、広い場所で開催しているため毎回多くの人が訪れている。スタッフは明南病院の調理師さんや、職員さん、地域の方、学生など様々である。参加者は地域の方が多く、ほんわか食堂は、なかよしごはんや西福寺おかげさま食堂のような予約や人数制限は無いため、気軽に参加することができるのが特徴的である。開催時間もお昼のため、お昼ご飯を食べに来る子どもたちや少年クラブの帰りに寄る子どもたちなど様々な理由から参加する方がいる。特に会場の近くは集合住宅が多いため、多くの家族や子どもたちが参加する傾向にある。開催場所や時間等々の連絡は、一度参加された方へはチラシの郵送等を行っていたり、ほんわか食堂の LINE を開設したりするなどして連絡をとって宣伝しているため連絡手段が充実しつつある。参加している子どもたちの中にはお手伝いをするために早く参加してくれる子もおり、楽しく準備を進めることができる。席は長机と椅子が用意されていて、参加者は自由な席に座ることができる。料理の提供は、バイキング形式で、スタッフが一人一人の好みや量に応じて料理を取り分けることができる。一人一人に調整することで、アレルギー対応しやすく、食べ残しを減らすことができている。参加者が集まり過ぎてしまうと配膳が混雑して提供が遅れてしまう場合や、席の確保が出来なくなるため、待っている方への配慮として効率的な食事が求められてくる。会場内には絵本コーナーなどがあり、会場の近くには公園があるため、食事後に子どもたちが遊びやすい場所が備わっている。

ほんわか食堂の特徴から交流について考えてみると、長期的な活動によって回を重ねているためスタッフ間の信頼は厚く、スタッフのつながりには深いものを感じた。しかし、初めて参加するボランティアにとっても過ごしやすい空間となっていた。参加者間では、子どもたちは別の小学校の子同士でも仲良く食事をとっているなどしていて、子ども達同士で固まって食事をとる場面も多くあり、ほんわか食堂が子どもたちにとって学校以外の交流の場となっていることが感じられた。習い事や地域の集まりなど他の学校の生徒と関わりを持つ場面はそう多くはないため、子ども食堂が学校の幅を超えた交流の場として存在しつつあるのではないかと思う。またほんわか食堂では、子ども食堂以外にも学習支援を行っている。子ども食堂の活動による子どもたちとの出会いが、学習支援という形でも困っている子どもたちのためになっているため、子ども食堂を居場所と感じる子どもは少なくなないと思う。

5.子ども食堂が生み出すつながり

3 箇所の子ども食堂の特徴からそれぞれの交流に着目して考えてきたが、子ども食堂によって様々な形の交流が生まれ、つながりを持つことで居場所化していっているのではないかと考えることができる。子ども食堂を通して情緒的なコミュニケーションを図ることが

でき、それが個人にとっての居場所となっているのではないかとも思う。レクリエーションやたわいも無い日常会話によって人と人が触れ合うことで、繋がりを強化することができる。その媒体として子ども食堂が存在しつつあるのでは無いかと思う。多様化する子ども食堂のあり方によって、子ども食堂に何を求めてくるか、ニーズも異なってくる。子ども食堂を始めたきっかけや願いは、いつからか活動によってターゲットが変化したり、立地や周囲の環境によって異なってきたりする場所もあるが、子ども食堂の形が多様化することによって個人にとっての居場所も増やすことができる。居場所の増加は、孤立や虐待などのネグレクトや不登校といった社会問題を抱える地域や家族、苦しむ本人にとっても救済措置となりうる場にもなってくる。子ども食堂には、ただ食によって得られる満腹感のみならず、他の価値観を感じることもでき、多くの可能性を秘めている。心の満足感や幸福感もまた居場所作りには必要な要素であり、一人一人にとって居心地の良い場所づくりもまた今後の子ども食堂に求められてくると思う。これからも子ども食堂の参加を続けることで希薄化する人と人とのつながりを世代交流や同世代の交流という形で触れ合える交流拠点として、より強固なものへと変える手助けができればいいと思う。